総括稿3

読むことと学ぶこと

～領域別B（文献系）がなぜ理学部になかったのか？～

理学部教授　上田 恵介

「領域別B（文献系）？」、「エッ、何だっけ？」、「そう言えば、そういうのあったような？」。記憶力が最近とくに低下しているような気がする（そろそろ来たかな？）。なんとか記憶をたどってみると、そういえば2009、2010年度に、私は全カリの総合チームメンバー（自然科学分野担当）として、総合チームの会議に出ていた。当時の大きな議題は2012年度からの全カリ改革で、あらたに総合科目に領域別科目群を設置するという議論がなされていたことを思い出した。

そのときの総合チームの会議では、全カリを通じて他学部生に各学部の専門を垣間見てもらうこと、そのためには古典や文献を読むことがひじょうに大事になるということが話題になり、そのために新たな科目群が必要ではないかという議論がなされたのだった。だが2016年度から領域別科目群はなくなる。「やっぱり無理があったかな？」というのが、私の正直な気持ちである。

ところでもともと、理学部は領域別Bに参加していなかった。理学部から領域別B（文献系）を提供することは可能なのか？理学部にこの議題を持ち帰って議論してもらったのだが、残念ながら「そんなの無理」という結論になった（だから理学部だけB群には加わっていない）。物理学も化学も生物学も、自然科学が進む速度はますます加速していて、もう今では、研究者でも自分の分野から少しでも離れた分野のことはわからない。誰にも科学の全容どころか、限られた分野でさえ最先端領域がどこにあるのかわからなくなってきている。10年前（いや5年前でも）の教科書はもう使えない。教科書は書かれるまでに時間もかかっているだろうから、そもそも教科書に頼っていたら、まともな自然科学の授業はできない。もうそんな時代に入ってしまっているのだ。だから昔の文献は必要ないし、そんな古いものを学生に読ませても無意味というのが、理学部の私以外の教員の意見だった。

だが私はそうは思っていない。理学部以外の学生が読んで面白い本、私が読んでもらいたいと思う本はいっぱいある。たとえばファラデーの『ロウソクの科学』（岩波文庫）、中谷宇吉郎の『雪』、寺田寅彦のエッセイ集など、文系の学生たちが読んでも興味の持てる、いまなお値打ちを失わない“理科系の古典”はたくさんある。オパーリンの『生命の起源』（岩波新書）だって、書いてあることは現代の生命科学からすれば、とても古くて、間違いもあるが、当時の気鋭の科学者が、「生命とはなにか、生命はいかにして発生したか」について考えをめぐらせ、実験を行なって、生命が発生する過程に迫ってい

る。科学者が自然界の法則をひも解いていくプロセスは、学生にとって、考えることの大切さを学ぶのにとてもすぐれた読み物である。ダーウィンの『種の起原』も大部で読みにくいが、なぜダーウィンの理論が現在も色あせないのかがよくわかる。エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』も、社会科学の本ではなく、自然科学の古典であると私は思っている（ので、これはむしろ理学部の学生に読ませたい）。領域別科目の議論のきっかけになった、“学生時代に多くの（自分の専門とは異なる分野も含めた）本を読むことの重要性”、これはいつまでたっても大学生である限り、大切なことなのではないだろうか。その意味で、理学部がB群を提供できなかったことはとても残念なことであると思っている。

昔の学生は本を読んだ。理系も文系も関係なく。かつて本を読むことと学生であることはほとんどイコールだった。私は地方大学の農学部出身だったが、学生運動華やかな政治の季節。学生たちはクラスでの議論について行こうと必死で本を読んだ。マルクス、サルトル、ニーチェ、羽仁五郎、吉本隆明、小田実、高橋和巳、埴谷雄高、柴田翔、大江健三郎、そして高野悦子の『二十歳の原点』。こうした本が、自分が生きていることの意味を考えさせ、学生たちの魂をゆさぶった。

いっぽう、昨今の学生はほとんど本を読まない。私が全カリで教えていた頃、どの講義のシラバスの備考にも「1年に100冊以上の本を読まない学生は来なくてよろしい」という一文を入れておいた。こう書いておけば、せめて少しは本を読んでくれるかなというかすかな願望からであった。それを見て、「とても厳しそうに見えて受講するかどうか迷いました」という殊勝な学生もいたので、私の講義に出席する学生たちは、さぞや沢山、本を読んでくれているのではという期待を持っていたものである。そんなある日、講義で読書量について学生に聞いてみた。「年に50冊以上の本を読んでいる人」と手を挙げさせたら、200人のクラスで1人しか手があがらなかった。「10冊以上」で数人。1冊も読まない人、という問いには、半数以上の手が上がった。がっかりである。近年、自然科学系の大学・学部で、学生に対する科学リテラシーの必要性が叫ばれている。だがそんなことよりもまず、学生が本を読まないということの方が問題ではないのだろうか。ことは科学リテラシー以前の問題だと思うのである。

かつては、学生たちに向かって読書することについて熱く語る自然科学系の大学教員もいた（たとえば『現代の青春におくる挑発的読書論』、白上謙一著、1976年、昭和出版）。だが近年、自然科学系の教員の多くは、総じて理系の学生は本を読まなくてもいいと思っているようだ。実際にうちの理学部でも、本を読んでいるヒマがあれば実験しろという雰囲気である。いっぽう文系の学生は本を読むのが仕事と思われている。しかしそもそも理系と文系という区別にそんなに意味はあるのだろうかと私は思う。たまたま受験で、文系と理系に振り分けられて、本が好きだけど数学の成績がよかったので理学部に来たとか、生物が好きだったが数学が弱いので文系に来たという学生もいる。私が教えた学生の中で、生物が好きで私のところに相談に来たドイツ文学科の学生は、海洋生物学関係の大学院へ進み、いまは日本のサンゴ研究の中堅として、立派に大学教員

をやっている。文学部心理学科の卒業生は、人の心を自然科学的に極めたいという動機を持って私のところにやってきて、鳥の研究をはじめ、大学院で博士号をとった。

今、学生と親の関心は就職である。就活する学生への手厚い援助をしてくれる大学が人気があるという。大学が学生たちにできる援助とは何だろう。エントリーシートの書き方や面接のやり方を教えるのも大切なことかもしれない。だが大切なことはそういうマニュアル的なノウハウではなく、かれらに人間としての力をつけてやることではないだろうか。

だからこそ、私は言いたいのである。

留年してもいいではないか、就職が遅れてもそれが何だ。ヒマがあるなら本を読め。学生たちよ、本を読め。読書こそが、君たちの心を鍛え、人としての力をつけるのだ。

うえだ　けいすけ